

延命処置なき旅立ち



旅立つ2日前の大野元栄さん。左上は元栄さんが記したリビングウイル(コラージュ)

最期は どこで

2月のある日、久万高原町露峰の大野昌利さん(72)が、1月に95歳で亡くなった母・元栄さんの遺品を整理していた時のこと。書類

をとじたファイルの中から手書きの紙が出てきた。「私は現在元気に暮らしていますが、重病になり再起しないとすれば、延命処置をしないでほしい」
終末期に延命治療を望むかどうかを記した書面、いわゆる「リビングウイル(事前指示書)」だった。

日付は2007年2月10日。作成のきっかけは分からないが、その1年前、体調を崩し訪問介護を受け始めている。みとられ方を考えるようになり、家族に伝えておきたいと思ったのかも知れない。昌利さんは正直驚いた。同居していたが、書面のことには知らなかった。が、すくすく

「ばあちゃんらしい」と納得した。

「病院はいや。家で養生する」が元栄さんの口癖だった。08年に亡くなった夫は4カ月入院し、最期まで積極的な医療を受けた。孫の石丸明美さん(42)は「少し苦しそうでした。ばあちゃんはその見とったから、なおさら延命措置はお断りだったんだと思います」と振り返る。

元栄さんは訪問診療と訪問介護を受けながら、住み慣れた自宅で過ごし、家族が見守る中、穏やかな表情で旅立った。

「自然なみとりやっただ。ほんま、ええ往生やった」と昌利さん。「ばあちゃんが家族に書面を手渡すことはなかったけど、希望通りの最期を迎えられたんじゃないでしょうか」(3面に連載「最期はどこで」第5部「リビングウイル」)